

1. 2007年度の事務部の行動目標

事務部は企画総務室、医事室、医療相談室、診療情報管理室からなり、病院全体の行動目標に沿って各々で業務目標を設定している。2007年度の行動目標は下記の通り。

- ① 顧客満足の向上
  - ・ 接客レベルの向上
  - ・ 患者ニーズの把握：マーケティングの実施
  - ・ 患者満足度調査の定期実施と分析、改善
  - ・ 連携先機関とのパートナーシップ強化（情報提供、返書実績の管理など）
- ② 業務の効率化と質の向上
  - ・ 診療情報電子化に向けた検討：レセプトの電子化、医事システムの更新
  - ・ 外来診療体制の再構築：診察室増室に伴う再編
  - ・ 診療情報管理体制の見直し、サマリー作成管理の徹底
  - ・ 施設・設備での安全確保とコストパフォーマンスの追求：エレベーター、空調機の更新
  - ・ スタッフへの情報提供推進
- ③ スタッフの成長・育成
  - ・ 働きがいとゆとりを感じる職場作り
  - ・ スタッフ個々のスキルアップ：必要かつ有意義な研修会の開催など
  - ・ 自己啓発の励行：セミナー・勉強会への積極参画、診療情報管理士等資格取得など
  - ・ 優秀な人材確保：看護学校の早期訪問、HPを用いた情報提供など
- ④ 収益性向上と経費の低減
  - ・ 2008年4月の診療報酬改定への対応検討：有用な施設承認資格の取得
  - ・ 病床の有効利用促進（病床管理会議の有用な運営、紹介件数の向上）
  - ・ 未受診患者の掘起こし：出前健康講座、HP等により情報提供
  - ・ 未収金対策の強化
  - ・ 管理会計の強化：部門別原価計算への取り組み、既存医療機器の採算性把握

2. 2007年のトピックス

- ① 医療機能評価Ver 5 認定
 

2006年度に受審した医療機能評価Ver 5 の認定証が届いた。この評価を裏切らない活動ができるように、医療の質・安全性を確保していくこととした。
- ② 外来・救急観察室改修工事
 

外来診察室の増室と救急治療環境の改善を図るために改修工事を行った。

外来診察室増室：4診察室での運用では昼間帯の救急外来診察に対応できるスペースがなかった。そこで処置室前に増設する形で第6診察室を増設した。これによりルーチンの外来診療枠も増え、患者数も増加し円滑な外来診療が進むこととなった。

救急観察室改修：インフルエンザなど感染症が疑われる患者やC P Aなど重篤な患者へ対応できるスペースとして観察室内に個室を設け、対応できる環境を整備した。

- ③ 出前健康講座好評
 

2007年度は通算17回、延579人の参加をみた。マンネリ化しない様に積極的に新しいテーマの開発を現場にお願いしている。また8月に開催された「港祭り」では健康相談コーナーを設置し、禁煙指導や栄養相談、腹部超音波検査など無料で提供した。高齢者が多い当地域において予防医学推進の意味でも本活動の持つ意義は大きいと感じている。
- ④ 宇城広域消防救急フェア協賛
 

9月9日(日)に宇城市小川町のダイヤモンドシティーバリューで開催された宇城広域消防が主催する救急フェアに協賛し、薬剤師や栄養士、看護師などが一般参加者に対し専門指導を行った。スタッフはボランティアで協力してくれた。
- ⑤ BLS講習会開催
 

2006年度に引き続き2007年度も開催し、23名の参加を得た。2008年3月9日(日)に行われたパールラインマラソン大会には救急ボランティアとして数名が参加し、実際心肺停止になった参加者に対し地元救急隊や熊本病院スタッフとの連携のもと救命活動を行い、幸いにも一命を取り留めることができた。その活躍は熊本日日新聞にも報道されたが、BLSの重要性を再確認する出来事となった。
- ⑥ 看護学校訪問
 

医療者の局所集中は続いており、当院の看護師不足は重要な課題となっている。福岡で実施された九州ブロック済生会の合同説明会にも参加したが、当院ブースを訪れる学生は皆無で、地方施設の悲哀を痛感した。また県内看護学校へOB同伴で訪問を実施し、見学の受け入れなど積極的に取り組んだ。
- ⑦ 地域貢献
 

3月1日(土)の開院記念日に合わせ職員有志で三角町西港近辺の清掃奉仕を行った。町民から感謝の言葉をかけられるなど、その様子は宇城市役所ホームページに記事として掲載された。
- ⑧ 医療機器の整備

上部消化管ビデオスコープ
下部消化管ビデオスコープ
超音波洗浄装置
麻酔ガスモニタ
A E D (2台+練習機1台)
血液/薬品保冷庫
線量計 (サーベイメーター)
輸液ポンプ
整形ハンドピース2種
与薬カート
泌尿器光学視管
膀胱ビデオスコープ
脊椎外科用手術フレーム
手術用ヘルメット4個
冷温蔵配膳車
カルテ・フィルム棚

### 3. 経営分析（次ページ参照）

2007年3月に7名まで減少した常勤医師数も4月に整形外科、内科、リハビリテーション科、7月に外科、10月に麻酔科、内科と増え、最高12名まで増員した。上期は患者数が伸び悩み病棟も空床が目立ったが、夏過ぎ頃より患者数が回復した。2007年度の収益の特徴は単価の高騰にあり、手術症例数、注射、リハビリによる収益増加等などにより入院単価が初めて3万円を超えた。外来も診察室増により患者数が4.65%増加し、外来単価も約千円upしたことで、収益も約70百万（11.21%）の増加につながった。また2007年度の薬価協議が年度内に妥結したことにより費用額の確定につながり、収支は黒字を記録した。

（千円）

	2007年度実績	2006年度実績	差異
医業収益	1,947,535	1,804,411	143,124
医業費用	1,923,277	1,848,943	74,334
医業収支	24,258	▲44,532	68,790

#### ① 入院収益

- 入院収益は、一般病棟5.89%増（亜急性期を含む）、回復期リハビリ病棟0.80%増と、対前年を上回った
- 一般病棟増収要因は、入院単価（28,276円→31,721円）の増加である。入院延患者数は前年比で約千人減少しており、入院収益は約10百万減少している。しかしながら手術料収益が55百万、リハビリ収益が15百万、注射料収益が13百万と増加し、入院診療収益は77百万の増収（8.59%）となった。
- 回復期リハビリ病棟増収要因は、患者数の増加による（10,066→10,297人、2.29%の増加）。従来は脳血管疾患患者中心だったものが整形外科疾患患者が占める割合が増えている。

#### ② 外来収益

外来収益増収要因は、外来患者数が対前年で4.65%増加し、外来単価が約千円upしたことにより、収益は約70百万増収となった。内訳をみると投薬料益が15.21%増加しており、外来収益全体の45.51%の割合を占めている。

#### ③ 人件費

約20百万円の増加。定期昇給による影響の他に、スタッフの増員などが影響したが、収益がそれを上回る伸びを示したために人件費率は47.6%と昨年度に比べ2.7%低減した。

#### ④ 医薬品・診療材料費

医薬品費が43百万、診療材料が40百万増加し、全体で18.4%増加した。投薬料収益と注射料収益、手術料収益が大きく増加しており、それを反映するように医薬品費、診療材料費が上昇したものである。しかしながら医業収支率は27.1%と前年度の24.7%（実質23.3%）から更に上昇しており、コストコントロールが大きな課題となってきた。

#### ⑤ 経費

2006年度は機能評価受審のために消耗器具備品や消耗品の大量整備を行っていた。また吸収式冷凍機更新による光熱水費が大幅に低減した事もあり、対前年で25百万減少した。

#### ⑥ まとめ

2007年度は病床利用率は予定より下回ったが、単価の大幅増により目標数値をほぼ達成した。医業収益は例年同様に対前年実績を上回り、入院では投薬料、注射料、手術料、リハビリ料の伸びが顕著である。外来においても投薬料の伸びが単価の増につながり、収益増につながっている。

医業費用ではスタッフの努力により経費・委託費の減少が他の費用の伸びを緩和した。最大の要因は年度内における薬価の妥結であり、このことが医薬品費の戻し入れとなり収支は好転した。

開院後5年を経過し、地域住民における当院の役割認識も定着してきたと考えられる。次年度以降も地域のニーズに応えることができる体制を整備できるように、医師をはじめ看護師などの医療スタッフの確保をはかり、医療の質・安全性の追求、業務効率化による働きやすく・やり甲斐のある職場作りを目指していきたい。

#### 主な保有医療機器

管理部署	医療機器名称	台数
外来・OP室	大腸ビデオスコープ	2
	上部消化管汎用ビデオスコープ	3
	電子内視鏡システム	1
	関節鏡一式	1
	膀胱ビデオスコープ	2
	空圧式結石破砕装置	1
	腹腔鏡下手術システム	1
検査室	自動血球洗浄機	1
	尿路機能検査装置	1
	全自動血液ガス分析装置	1
	無散瞳眼底カメラ	1
	携帯型心臓超音波診断装置	1
	超音波診断装置	3
	血圧脳波検査装置一式	1
放射線検査室	骨密度測定装置	1
	X線一般撮影装置	5
	CRシステム	1
	X線TV	1
	全身用X線CT装置	1
	CT装置	1
リハビリテーション室	MR I装置	1
	赤外線治療器スーパーライザー	1
臨床工学室	人工呼吸器	4
	脳波計	1

みすみ病院 経営指票

項目	区分	計算式	単位	2005年度	2006年度	2007年度
病床数	許可数		床	140	140	140
	実働数	年間実働病床延数/365	床	140	140	140
一日平均患者数	入院	年間入院患者延数/365	人	108.3	110.1	107.7
	外来	年間外来患者延数/年間診療日数	人	124.4	122.4	128.1
	紹介患者率	紹介患者/新患入外患者	%	33.1	—	—
	外来対入院比率(暦年)	一日平均外来患者数/入院患者数		1.1	1.1	1.2
財務比率	平均職員数	毎月末職員数合計/12ヵ月	人	132.1	139.5	137.8
	平均医師数	毎月末医師数合計/12ヵ月	人	10.3	11.1	12.4
	流動比率	流動資産/流動負債	%	244.2	221.4	332.9
	自己資本率	自己資本/総資本	%	5.3	1.9	3.9
	負債比率	他人資本/自己資本	%	1,789.2	5,100.9	2469.0
	固定比率	固定資産/自己資本	%	1,403.0	3,664.7	1672.8
	固定長期適合率	固定資産/(自己資本+固定負債)	%	83.0	81.3	72.7
	総資本回転率	医業収益/総資本	回	0.66	0.71	0.75
借入金比率	借入金平均残高/医業収益	%	26.4	24.9	23.1	
収支比率	人件費率(含む委託人件費)	(人件費+委託人件費)/医業収益	%	55.6	56.0	51.4
	材料費率(医薬品・診療材料)	材料費/医業収益	%	20.6	23.2	27.1
	経費率	経費/医業収益	%	9.6	9.5	7.5
	賃借料率(再掲)	機器賃借料/医業収益	%	1.3	1.2	1.2
	委託費率(除く人件費)	委託費/医業収益	%	3.5	3.4	4.5
	減価償却費率	減価償却費/医業収益	%	8.2	8.1	7.6
	医業収支比率	医業費用/医業収益	%	99.4	102.5	98.8
	金融費用比率	支払い利息/医業収益	%	0.0	0.0	0.0
	医業利益率	医業利益/医業収益	%	0.6	-2.5	1.2
	経常利益率	経常利益/医業収益	%	1.0	-2.2	1.5
成長率	当期医業収益/前期医業収益	%	108.2	105.9	107.9	
生産性指標 労働効率	職員一人当たり医業収益	医業収益/年間平均職員数	千円	12,906	12,935	13,961
	職員一人当たり経常利益	経常利益/年間平均職員数	千円	128	-280	2,291
	医師一人当たり医業収益	医業収益/年間平均医師数	千円	164,963	162,804	157,059
	100床あたり職員数	年間平均職員数/年間実働病床数	人	94.3	99.6	98.4
	入院患者100人当たり職員数	年間平均職員数/年間平均入院患者数	人	122.0	126.7	127.9
	外来患者100人当たり職員数	年間平均職員数/年間平均外来患者数	人	106.2	114.0	107.6
	入院患者一人一日当たり収益(一般病棟)	入院収入/入院患者延数	円	27,130	28,276	31,721
	入院患者一人一日当たり収益(回復期病棟)	入院収入/入院患者延数	円	24,362	25,191	24,806
	外来患者一人一日当たり収益	外来収入/外来患者延数	円	16,011	17,182	18,271
	労働生産性	(医業収益-人件費以外全)/年間平均職員数	円	6,476,736	6,193,037	6,909,391
労働分配率	人件費/(医業収益-人件費以外全)	%	98.8	105.2	97.5	
生産性指標 病床効率 (年間)	一床当たり医業収益	医業収益/実働病床数	千円	12,176	12,889	13,911
	一床当たり利益剰余金額	利益剰余金/実働病床数	千円	246	-621	374
	一床当たり固定資産額	固定資産/実働病床数	千円	13,606	12,767	12,089
	病床利用率(一般病棟)	年間入院患者延数/年間実働病床数	%	79.9	82.5	79.2
	病床利用率(回復期病棟)	年間入院患者延数/年間実働病床数	%	71.0	68.5	70.3
	平均在院日数(一般病棟)	年間入院患者延数/((入院+退院)/2)	日	15.7	15.4	18.1
	平均在院日数(回復期病棟)	年間入院患者延数/((入院+退院)/2)	日	63.1	52.6	47.8
	病床回転率(一月当り 一般病棟)	365/12/年間平均在院日数	回	1.94	1.98	1.69(うるう年)
病床回転率(一月当り 回復期病棟)	365/12/年間平均在院日数	回	0.48	0.58	0.64(うるう年)	